

デフ陸上競技選手へのコーチングに関する実践報告

～手話にかわるジェスチャーを使用して～

○池和田 克彦(東京女子体育大学) , 宮城 莉央(東京学芸大学) , 繁田 進(東京学芸大学)

1. 本取り組みのきっかけ

大学の陸上競技部に聴覚障害学生(以下デフ選手)が入学した。しかし、大学の指導者は初めてデフ選手を指導することになったが手話ができないため、どのように指導すれば良いのか考える必要があった。

2. 実施した内容

大学陸上競技部に所属している聴覚障害の男子学生デフ棒高跳選手(以下デフ選手)1名を対象に棒高跳の跳躍練習時の指導を一般の選手と一緒にいった。練習後にデフ選手と指導者の間でどのようにすれば意思の疎通ができるのか意見を出し合うことにした。デフ選手は聴覚障害者の視点から、「指導者の伝え方」について問題点や具体的な改善方法を考え指導者へ伝え、指導者はその提案から指導者視点でも改善が必要なことを考えた。

3. 提案・改善の検討結果

デフ選手の視点

- ・ アドバイスは棒高跳びの動作を含めてジェスチャーで示してほしい



指導者の視点

- ・ デフ選手と指導者間でジェスチャーが棒高跳のどの局面の動作なのか、また何を意味しているのかについての共通理解が必要

デフ選手と指導者の間で、事前に共通理解ができている手話に代わる

【競技に特化したジェスチャー】があるとアドバイスが伝わりやすい



ジェスチャーの例 : 助走のスタート位置を 10 cm前に変更することを伝える場合

棒高跳ピットを横から見た図



助走距離



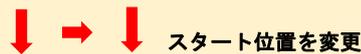
スタート地点



10 cm



前に



↓助走路

←支柱・バー

↓マット

4. 今後の課題

デフ選手の競技力が向上するにつれより、より詳細なアドバイスが必要となる。このため、今後はそれに対応できるようなジェスチャーの種類を増やす必要があると思われる。

問い合わせ先

東京女子体育大学 女子体育研究所 池和田 克彦

Email : k-ikewada@twcpe.ac.jp